

佐世保中央病院広報誌

はばたき

Sasebo Chuo Hospital
Public Relations
Magazine

HABATAKI

vol. 178

2023
夏秋号

医療を通して人を知る

特集 乳がん



TAKE FREE



特集

乳がん

人の数だけ違う、病気のあれこれ。
その人だけの思い。それでも、生活は続く。

取材・文＝梅本真実
写真＝中村友香



患者さまインタビュー①

ここは空洞じゃない。
楽しみをどんどん詰め込んでいくよ。

「いつもありがとね！」はつ

らつとした笑顔で常連客を見送る新道憲子さん(69)。50年以上、亡き叔母と二人で理容室を営んできた。今年3月にがんが見つかり、4月初旬に右乳房全切除術を受けた。5日間入院し4月末に仕事復帰。リズムよくはさみを動かす姿は、取材者に刷り込まれていた大病や術後に対する負のイメージを一瞬で吹き飛ばした。あふれ出る清々しさの真意を伺った。

●● 気持ちがあうぞく
「ステージ何？」

がんを告知されたとき、淡々と受け止めた。取り乱すこともなかったが、客のいない店内でこれまでの人生に思いを巡らす時間が増えた。浮かんでは消える思いの波に、涙が流れた。「できたものは治すしかない」。夫との間では、言葉少なに治療へ向かっていた。そんなとき、離れて暮らす息子から「ステージ何？」と聞かれ、「まだ聞きたくもない」と珍しく

声を荒らげることがあった。冷静だと思っていた自分の奥底に

患者は病を告げられたのも束の間、医者と話

し合いながら少しずつ前に進んでいく。一方で

世間の人は、がんと聞くとすぐ「ステージ」の話

をする。心配し

てのことだと頭では分かっていた

も、その質問は気持ちが悪く

ものだった。知るべきかと2、3日考えあぐね、必要なら先生が伝えてくれるだろうと心を決めた。術後、主治医からステージが伝えられた。

●● 隠さず生きる

遺伝的に他の病を懸念していた。がん検診は毎年欠かさ



15年来のお客さんと話が弾む

なかったが、乳がんは何となく先延ばしに。2年ぶりの検査で異常が見つかった。「何でも他人事ではない」。ありふれた

その言葉が、自分の胸にぐさりと刺さった。

叔母が病気をしたとき、罰が当たったと井戸端会議されるのが嫌でひたすら隠していた。

隠すのは苦しいだけだった。人の口に戸は立てられない。何を言われても、受け入れながら

生きようと覚悟を決めた。嫌なこととはあっても、日々の気づきは人から学ぶ。五感を開いて

「ちよつと面白かった。なんか笑った」と、些細な楽しみを積み重ねていきたい。

●● 固定観念からの解放、それがこれからの私。

身体の一部を失い、別の世界に目が向くようになった。LGBTQ（性的少数者）やジェンダーについて考える自分がい

解放、それがこれからの私」と憲子さんは語った。

失ったものにとらわれず、経験は新しい扉への鍵だったと心を弾ませることができると人間の清々しさ。彼女のそんな姿

は胸の深いところに染み込んだ。その日一番の快活さで、憲子さんは最後にこう言った。「片

方乳房はなくなりましたが、ここは空洞じゃない。これからどんどん楽しみを詰め込んでいくよ」。



「仕事ができるありがたさをかみしめている」と憲子さん

Interview

新道 憲子さん

理容師・69歳

患者さまインタビュー②

療養は束の間のスローライフ。 楽しんだもん勝ち。



静かに支えてくれる夫、長男（5歳）と長女（3歳）

玄関先でにこやかに出迎えてくれた齊藤文香さん（34）。きゅつとあがった口角が明るさを表す一方、凧のような落ち着きを併せ持つ不思議な印象を受けた。今年1月、右乳房にしこりを見つげがんと診断。3月から薬物療法を続け、8月に手術を予定している。仕事人間の彼女に突如訪れた休日の日々。どんな思いで過ごしているのか、話を伺った。

●「先生、死ぬっちゃうろ？」

がんを告知された日は、担任をしていたクラスの授業参観日だった。昼休みに病院へ。病状や治療の説明を受け、急いで学校に戻った。落ち込む暇はなく、授業の最後に「先生は乳がんでした！」と告げた。

日常が壊れそうで耐え難く、

3月に治療を始めるまでは毎日一人で泣いた。児童たちに副作用で脱毛することや体調を崩すと伝え、長男と長女にはおっぱいの病気だと説明。関節痛、腹痛、手のかゆみ、吐き気、口や鼻の不快感。小さな不調はあったものの、修了式まで働けた。

あるとき他のクラスの児童に「先生、死ぬっちゃうろ？」と言われた。「死なないから大丈夫よ」と返すと「え、そうなの？がんなのにな？」と驚いていた。がんⅡ不治の病というイメージは、子どもたちにも刷り込まれている。生きる教材として真実を伝えると誓った。

●「風邪ひいた」くらいいい

かわいそうだとは思われない。「まだ若くて子どもも

療養を機にメンテナンスしたトランペット。
高音をうまく弾けるようになりたい



齊藤 文香さん
小学校教諭・34歳

小さいのに」と聞こえてくるよ
うで。職員室でも初めは腫れ
ものに触るような雰囲気があっ
た。「がんは結構なパワーワー
ド。でも他の病気と同じで治療
するだけ。決してタブーな話
題じゃない」。はっきり伝える
と周りの緊張がほぐれた。「『風
邪ひいた』くらいにしていれば、
周りも普通にできるかも。きつ
いときだけ言えばいい」。病を
公にして、抱える事情を打ち
明けてくれる人もいた。自分
だけが特別ではなかった。

●「花が咲くかもしれないね」
思いのほか脱毛のショックは
なかった。初めは衝撃を受けて
いた我が子も「生えてきますよ
うに」とお風呂で残った髪に水
やりをしてくれた。「花が咲く
かもしれないね」と笑い合った。
ウィッグは美容師をさせてい
る児童の保護者が教えてくれ、
あれもこれもと8個まで増え
た。「朝はショートで保育園へ、
夕方はロングで迎えに行くこと
も。戸惑う先生に『ヤマタノオ

ロチです』って言うの」と軽快に
笑う。体調を細かに記す手帳に
は「ウィッグ、快適やん」。こ
ごぞとばかりに楽しんでいる。

●早くおばあちゃんに
なりたい

病気をして持ち前のポジティ
ブさは増すばかり。心配する
家族に「治るならいくらでも
心配するし悲しむ。思い煩う
より楽しんだ方がまし」だと
伝えた。

治療に入る前は、病院に籠
りずつと具合が悪い生活が待っ
ていると思っていたが、実際に
訪れたのは普通の日常だった。
せつかくの療養期間は「楽しん
だもん勝ち」。大学時代心残り
だったトランペットやピアノ、
刺繍にガーデニング。やりたい
ことが次々に湧き「すごく忙
しい」と笑みをこぼす。



「ウィッグの色味に合わせて服を買うのが
楽しくて」と話す文香さん

一番の変化は、年を重ねら
れるのは幸せなことだと思っ
ようになったこと。乳がんの世
界に来たら「まだだったの34歳」
だった。文香さんは目を輝かせ
「早くおばあちゃんになりた
い」と語った。
事実を受け止め、建設的に
前を向いている。初めに感じ
た風のような印象はこれだった
のかと腑に落ちた。笑うと右
側にだけえくぼができる、と
びきりチャーミングなおばあ
ちゃんになるに違いない。おば
あちゃんになった彼女にもう一
度、話を聞く日が待ち遠しい。

ドクターインタビュー

取材・文・写真〓梅本真実

医師と患者は対等。 すべては患者さんの 笑顔のために

診察室から笑い声。手術説明に同席していた取材者の予想は杞憂に終わった。がん、深刻、笑ってはいけない……。自分のステレオタイプな憶測に苦笑い。「どんな状況でも患者さんには笑顔でいてもらいたい」という馬場雅之医師（乳腺外科部長）に話を聞いた。

「船の便、何時がありますか」

「治療を支えてくれる人の、一番下のお子さんはいくつですか」

こんな風に始まる馬場の診察。患者の顔には「？」。背景を把握し終わると、病状や治療の話に入る。「治療しながら



Interview

乳腺外科部長

馬場 雅之 医師
ばば まさゆき

も生活は続く。患者の生活スタイルを考慮したうえで治療計画を進めることは「絶対条件」と語る。

乳がんは、ステージ1で見つければ5年生存率97%とされ「恐れる病気ではない」（馬場）。いかに早く見つけ、再発させないかが鍵となる。治療法はがんの種類や

病期により異なるが、5〜10年先の予後を見据えて各治療のメリットとデメリットを徹底的に説明する。

「病や治療法を正しく知り、多様な選択肢から望む生き方

に合うものを自分で選ぶことが、後悔のない人生につながる」。その揺るぎない信念を胸に、馬場は患者の話しぶりや表情、同席する家族との関係性を観察。対話を重ねて人間性を捉え、本心をすくい取る。そして、その人に合った情報を慎重に取捨選択して伝える。「治療の決定権は医師ではなく、患者にある。医師の考え方を見極め、限られた中からでも選んでほしい」と願う。

「自分の診察室から出てきた患者さんは笑っているらしい」と目尻を下げる。来院するだけでも苦痛なはずの患者を、さらに苦しめたくはない。しかし、嘘はつかない。病の事実、考えられる予後は初めに詳しく伝える。事実をきちんと受け止めたうえで治療に向かえるよう、胸襟を開いて患者と向

き合う。

医師と患者は対等。医師は特別な存在ではないという。一人の人間としてフレンドリーに接するのが馬場スタイル。先生、高貴というイメージに抵抗があり、白衣は着ない。「すべては患者の笑顔のために。真摯に一人ひとりと向き合う」というシンプルな哲学を胸に、白衣を着ない医師は今日も患者の前に立つ。

Profile

1979年（昭和54年）大村市生まれ。2006年川崎医科大学卒業。長崎医療センター（大村市）で救急救命を学び、2010年に長崎大学病院腫瘍外科へ入局。様々な病院の腫瘍外科で研鑽を積み2017年、佐世保市総合医療センター乳腺外科へ、佐世保地区の乳腺医療崩壊の危機を目の当たりにし、乳腺専門医の資格を取得。2022年に当院外科副部長、今年より現職。

好きなことばは「たとえ明日、世界が滅亡しようとも今日私はリンゴの木を植える」（マルティン・ルター／ドイツの神学者）

馬場医師に聞く！

乳がん Q&A

Q 乳がんはどんな病気？

A 乳房にできる悪性腫瘍。特に40～60代前半の方に多く、日本人女性の9人に1人が発症するといわれます。男性の乳房にも発生することはあります。ステージ1の5年生存率は97%とされ、早期に見つかれば多くの場合治る可能性があります。

Q 自覚症状は？

A しこりで発見される場合が多いです。日頃のセルフチェックを強くお勧めします。

Q 乳がんと診断された場合、相談できる場所がありますか？

A 全国のがん拠点病院には相談支援センターが設置されています。当院では「がん相談支援センター」を設け、治療や副作用のこと、お金のこと、治療と仕事や家庭との両立などの相談を受け付けています。お気軽にご相談ください。

がん相談支援センター

☎0956・33・7151

平日のみ午前8時半～午後5時半



Q 原因は？

A 肥満、過度のアルコール摂取、喫煙などの生活習慣や遺伝性（患者の5～10%程）が考えられます。しかしながら、基本的に予防は難しいと考えられています。

Q どんな治療をするの？

A ほとんどの場合は手術をし、放射線治療や薬物療法（ホルモン剤や抗がん剤など）を組み合わせで治療します。治療法や治療薬は乳がんの種類や病期により異なります。

Q 検診について教えてください

A 乳がんは予防が難しく「早期発見・早期治療」がとても重要です。そのために欠かせないのが、がん検診です。40歳以降は定期受診が推奨されています。各自治体や職場の検診により自己負担額は異なりますので、該当する窓口にお問い合わせください。

PICK UP

＼ 介護サービスのことならおまかせあれ /

退院支援コーディネーター



地域医療連携センター
退院支援コーディネーター

福野 友生
Tomonari Fukuno

退院後のスムーズな暮らしをお手伝い

当院では、患者さんが退院後すぐに必要なサービスを受けられるよう入院中から手厚くサポート。介護サービスに特化した退院支援コーディネーターを配置し▷介護保険制度の説明や申請代行▷在宅復帰に関するサービス利用の提案—などのお手伝いをしています。

突然降りかかる病気やけが。戸惑いや不安を抱え

ながら、患者さんやご家族は限られた入院期間の中で様々な決断が必要になります。「ご本人やご家族の負担を少しでも減らし、退院後のスムーズな暮らしへつなげたい」。そんな思いでお一人おひとりの気持ちに寄り添い、ご自宅の環境やご要望に沿ったサービスをご案内させていただきます。お気軽にご相談ください。

NEW

当院広報誌「はばたき」が
新しくなりました



医療という視点から人間の多様性を考えていきたいと、

当院広報誌「はばたき」は新しくなりました。

疾患や障害の有無に関わらず、誰もがあたりまえに持ち合わせている多様性について考えを巡らす読みものをお届けしていきます。

自分とは違う人が、何を感じ生きているのか。

共感できなくてもいい。全然理解できなくてもいい。

でもきっと、無知であるよりは、はるかにいい。

医療を通して多様性を知り、違いを楽しむ豊かな社会へ。

地域支援病院として、その一翼を担えるよう発信し続けていきます。

INFO 初めて外来受診を希望される方へ

- 外来受診は、すべて時間帯予約制です。受診を希望される方は、お電話にてご予約ください。
- 原則として、かかりつけ医療機関からの紹介状が必要です。紹介状がない場合、通常の初診料に加え初診時選定療養費7,700円(税込)をご負担いただきますのでご了承ください。

予約窓口

紹介状がある方 ☎0120-33-8293(地域医療連携センター)

再診/紹介状のない方 ☎0800-7000-888(コールセンター)

- ・ 土曜日は休日診療体制です(救急部は24時間体制)。
- ・ 医師の都合により休診する場合があります。
- ・ 全ての診療科は時間帯予約制です。事前にご予約ください。

INFO 長期療養中の方へ就労支援相談会を開いています

がん・肝炎・糖尿病など長期療養が必要な方を対象に、ハローワーク専門相談員による就労支援相談会を開いています。ご希望の方はお気軽にご連絡ください。

- 開催日 毎月第1水曜日 10:00～14:00
- 内容
 - ・ 治療と仕事の両立について
 - ・ 体調に合わせた職業紹介
 - ・ 制度の案内・職場との連携 など

〈ご予約・お問合せ〉

がん相談支援センター ☎0956-33-7151

取材・文 / 梅本 真実

食いしん坊(4歳)と暴れん坊(1歳)の姉妹の母。元新聞記者で現在はフリーランス。

写真 / 中村 友香 Cafuné

フリーカメラマン。さりげなくもかけがえのない瞬間を逃さない。

デザイン / ASHITAKA DESIGN

佐世保を拠点にデザインの可能性を探求・挑戦するクリエイター。

印刷 / オムロプリント

心揺さぶるものづくりで人と人を繋げる。日々新たな価値創造に挑み続ける。

協力 / 佐世保地区障がい者就労支援協議会

「福祉が育つ街づくり」をモットーに誰もが住みやすい街づくりを目指す。

発行 / 社会医療法人財団 白十字会 佐世保中央病院

患者さんの同意のもと取材しております。本誌掲載の写真・図版・記事などの無断複写・転載を禁じます。

親子の愛

(グスタフ・クリムト作)



表現者 saori

佐世保生まれ。2014年より就労継続支援B型事業所 MINATOMACHI FACTORYに所属。極細のペンで下書きもなく世界を描くボールペン画家。色彩の理を引き剥がし、色鮮やかな世界を再構築する。作品は独特な歪みを持ち味に繊細さと鮮烈さを併せ持つ。近年は様々な画材で表現の幅を広げている。

表紙を飾る作品は、佐世保地区障がい者就労支援協議会加盟事業所に通われる利用者の方々から応募いただいたものです。応募作品17点は全て、当院1階の売店前に展示しております。是非ご覧ください。